平成 25 年度日本語研究推進事業
実践報告資料集

日本語指導研究推進校連絡会

目　次

１　神戸市立中央小学校　１ ページ

２　芦屋市立潮見小学校　７ ページ

３　伊丹市立天神川小学校　15 ページ

４　姫路市立琴陵中学校　20 ページ

日本語指導研究推進事業　実践報告資料

［学校名：神戸市立中央小学校］

【具体的な研究テーマ】
自分の思いを進んで日本語で表現しようとする子どもの育成

１　教科：単元名 かけざん（１）（２）	
２　実施日（時期） １０月～１１月	３　実施場所 ２年生各教室

４　児童・生徒の実態に応じたねらい

(1) 児童の様子･･･学年・国籍、学習状況、日本語習得状況など

・各学年に日本語指導が必要な児童がいるが、本報告は２年生のみ。

・Ｈ：（中国）　生活言語は支障ない程度に獲得している。学習においても指示はある程度理解できていて、友達の様子を見て判断している。自分が取り組んでいることや考えていることに自信がないので、授業中の発言がほとんどない。書くことにおいてはずいぶんと力を伸ばし、作文に関しては、時間はかかるが自分の思いも少しずつ表現し始めている。

Ｂ：（パキスタン）　まったく日本語を話すことができずに入学。日本語指導教室での指導や１年間の学校生活のなかで、日々繰り返し使うことばを身につけ、困難が少なくなっている。学習意欲が高く、今年度の２学期以降では間違っていても積極的に発言をするようになってきた。

(2) 日本語指導にかかる目標

教科学習の中で必要な学習言語を獲得し、その言語を用いて自分の考えを表現できるよう、分かりやすい授業づくりをめざす。

＜本単元での目標＞

九九づくりの活動を通して、「算数ことば」を用いて自分の考えを表現できるようにする。

例）〇の□つ分　～ばい　１つ分のかず

(3) 主な学習活動

・挿し絵をもとにかけざんの式をつくる（２～５のだん）。

・九九の暗唱。

・文章題から１つ分の数をみつけ、正しく立式する。

・アレイ図を用いてかけざんの式をつくる（６～９、１のだん）。

５　評価の観点

〇算数的活動を通してかけざんの意味を知ることができる。

〇九九を覚えることができる。

〇かけざんの言葉を使って自分の考えを説明することができる。

６　指導内容の概要

・挿し絵をもとに題意をつかみ、ブロック操作や絵をかくことによって「１つ分の数」をとらえる。

・「〇の□つ分」ということばを使ってかけざんを説明する。

・たし算を用いてかけざんの答えを出す。

・九九を覚える。

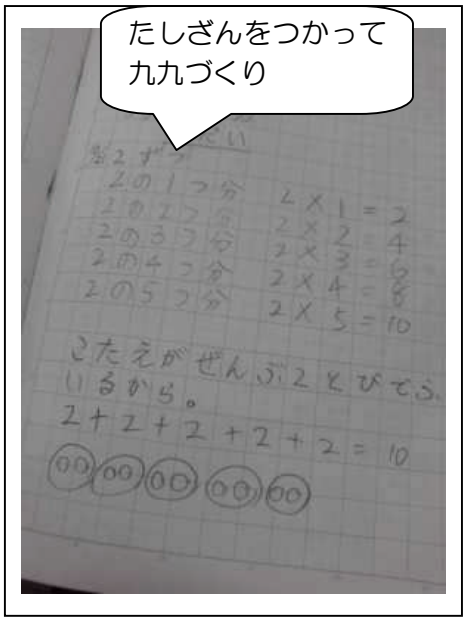
・「かけられる数」と「かける数」を意識してことばの式を作る。

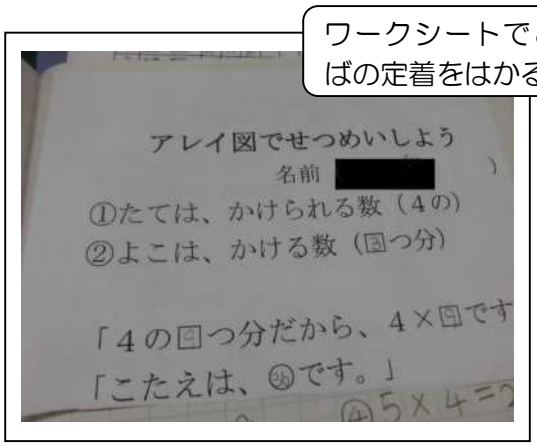
・かけざんを使って考える文章問題を作る。
・アレイ図を使って九九を構成する。
〇上記のような学習活動を通して、子どもたちが九九を暗唱するだけではなく、九九の考え方を理解し算数言葉を使って自分の考え方を説明することができるよう、大切な言葉を繰り返し用いて指導する。

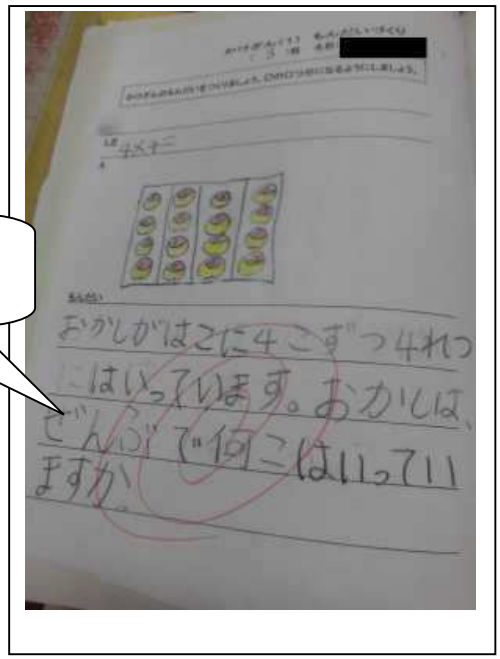
7　指導内容・方法において工夫したところ
・ブロック操作をくりかえし、〇ずつ増えていくという量感をつかませるようにした。
・「〇の□つ分」を言うことを繰り返すことにより、ことばの定着をはかった。
・ワークシートを用いて、自分の考えをまとめさせた。
・発問を精選し、繰り返し使うことばを言い換えることのないようにした。

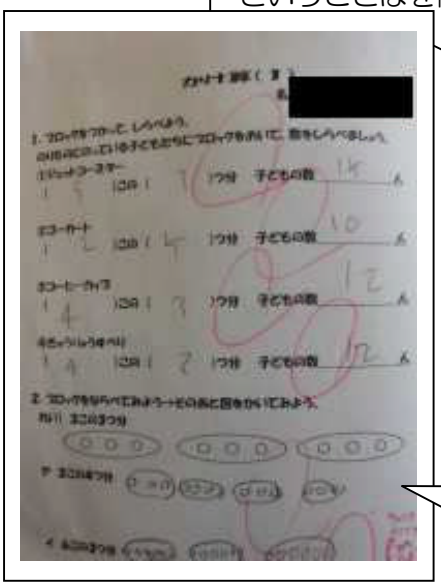
8　教材・教具
・ワークシート　・ブロック　・アレイ図　・拡大挿し絵

9　活動の様子（児童のノート）



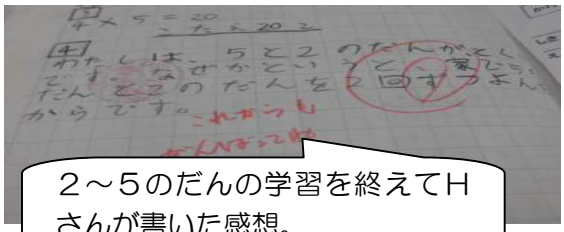






10　児童・生徒の感想等

・Ｈさんは、九九を覚えた喜びを短いながらも自分の言葉で表現することができた。実際は、簡単な２～５のだんの九九でも覚えるまでには時間がかかったが、周囲の友達が一緒に九九の練習に付き合い、Ｈさんも楽しんで取り組むことができた。



２～５のだんの学習を終えてＨさんが書いた感想。

・Ｂさんは、進んで挙手をして発言をすることができた。九九づくりの学習は、毎時間の流れがパターン化されていて分かりやすかったので、絵をかいて課題を把握し、１つ分の数をつかみ、「○の□つぶんなので、○かける□です」という言い方で立式のわけを説明していた。聞く力を伸ばし、教師が繰り返し使う言葉を覚え、自分の考えを表現するときに使っている。Ｈさんは、発言で友達を納得させ、賞賛を得ることで、自信をつけたように思う。九九の暗唱は発音しにくいことばがたくさんあり苦労していたが、意欲をなくすことなく取り組み、九九テストでの合格を心から喜んでいるようだった。

11　日本語習得度チェックシートの活用と効果など

・併設の日本語指導教室では、日本語教師連絡協議会の先生方にボランティアでご指導いただき、日本語の習得度をはかっていただいている。日本語指導教室では、まず生活言語を身につけさせる。そのあとは、学年担当と連携し、授業においての困り感を減らす努力をしている。

・２年生の支援対象児童に対して、ＤＬＡを使った測定を行った。予想していたより生活言語の力があり、語彙も豊富であることが分かった。支援対象児童の言語能力が明確になり、授業内容の工夫につながった。

12　実践をとおしての成果

・学校全体の研修では、昨年度に引き続いて、それぞれの学級の授業で、児童が日本語を使い、自分の思いを書いたり話したりして表現できる力を身につけられることをめざして研修を進めてきた。

４月	・日本語指導が必要な児童について情報共有
６月	・指導授業（１・２・４・５年）　授業後臼井准教授から指導
７月	・日本語指導教室の取り組みについて、連絡会
８月	・ＪＳＬの考え方をいかした指導案づくり（臼井准教授）
９月	・指導授業（１年・２年・４年）授業後臼井准教授から指導
１１月	・指導授業（1 年・２年・３年・４年）　授業後臼井准教授から指導
２月	・指導授業（1 年・２年・３年・４年）　授業後臼井准教授から指導

・今年度、異動してきた教師を中心に、分かりやすい授業を作るために研修を積み重ねた。

・それぞれの教師が自分の授業を見直し、発問や板書の工夫に取り組むことができた。

・教科研修とタイアップし、体育の学習でも効果的なことばかけの手立てを工夫し、授業づくりをした。児童が友達の動きを助ける具体的なアドバイスができるようになれば、かかわりも増え、より楽しい学習活動にすることができた。

・提示する資料の精選やワークシートの形式など、各教師による授業を分かりやすくする工夫の日常化が進んだ。

13　今後の課題

・分かりやすい授業のために指導の手立てを工夫してきたが、児童は力をつけ、自信をもって発言したり簡単ながら自分の考えを書きあらわしたりできるようになってきた。さらに力をのばすため今後は、教材や児童に与える指示の内容を、分かりやすく、しかし簡単すぎないものにし、児童が自分の力で表現する活動を増やしていくものにしなくてはならない。

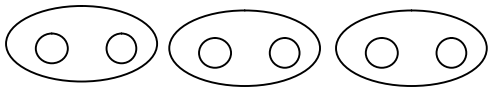
・日本語指導を必要とする児童が、支援を受けながらでも、自分の考えを友達と交流させることができるように、「聞く」「考える」「話す」が総合的に行われる話合いの活動を授業の中に増やしていきたい。話合いの場で活躍できれば、日本語指導を必要とする児童もさらに自信をもって活動できると考えている。

第２学年　学級　算数科学習指導略案

指導者　〇〇　〇〇

１．日時　　１０月
２．単元　　「かけざん（１）」
３．本時のめあて　〇乗数が１ずつ増えると答えが２ずつ増えることに気づき、２の段の九九を構成するとともに、その唱え方について知る。
〇「～～ずつ」という言い方で、かけざんの考えかたを説明することができる（日本語）

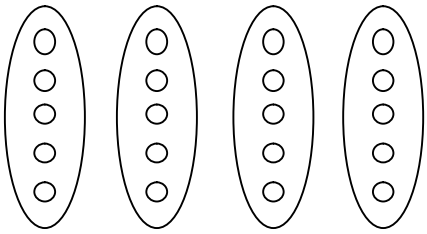
５．学習展開

学習内容	児童の活動	指導の手立て（・）と評価（〇）
１．課題を把握する	●１台に２人ずつ乗り物に乗った子どもたちの絵をもとに、４台分の答えまでを累加で求める。 ゴーカートは１台分から４台分まで、じゅんにのれる人の数をしらべましょう。 １台分　２×１＝２　　２台分　２×２＝４ ３台分　２×３＝６　　４台分　２×４＝８ ●かけ算の式から見つけたきまりや気づいたことを話し合う。 ・２とびになっている。 ・かけられる数はいつも２。 ・かける数はひとつずつ大きくなる。 ・答えは２ずつ増えている。	・１台に２人ずつ乗っていることをおさえる。 ・「２台分では、何人ですか」。 ・どのような式に表すことができるでしょうか。 ・「〇の□台分」だからかけざんで考えることができることを確認する。 ・式を見て、気づいたことをノートに書かせる。 ・５の段と比べて考えている児童をほめる。 ・時間を決めて発表をさせる。 ・ブロックの操作を掲示することで２ずつ増えていくことをおさえる。 〇乗数が１ずつ増えると答えが２ずつ増えることに気づくことができる。
２．見通しを立てて問題を解く	５台から９台までの人数を調べよう。 ２×５＝１０　　２×６＝１２ ２×７＝１４　　２×８＝１６ ２×９＝１８ ・２ずつ増えているから １０＋２＝１２　１２＋２＝１４ ・２×５と５×２はどちらも１０になる。 ・２を９回足したよ。 ・絵を描いて調べた。 例） 	・見つけ出したきまりをつかって、２のかけ算を仕上げるよう助言する。 ・図や言葉など自分の考え方を説明できる方法で表現させる。 ・自分の考えがまとまらない児童には、ブロックを用いて、「２ずつ増える」ことを確認し、絵に表させる。 ・５の段の学習を振り返り、参考にできるようにする。
３．学びあい	●自分の考えが書けたら、となりの人に説明をする。 ●発表する。	〇２の段の構成が自分なりの方法で表現することができる（ノート）。 ・代表的な考え方を表現している児童には、ボードを使ってみんなに発表できるよう促す。 ・発表する児童の言葉が足りないときには、付け加えて分かりやすくなるようにする。
４．まとめ	●九九の唱え方を知る。 ・教科書Ｐ１２を見て、正しく唱える。	・方法を変えながら、何度も声に出して唱えることができるよう工夫する。

第２学年　算数科学習指導略案

指導者　○○　○○

１．日時　　１０月
２．単元　　「かけざん（１）」
３．本時のめあて
●３・４・５段の九九の文章問題を正しく立式して解くことができる。
●「○の□つ分」ということばを用いて立式のわけを説明する（日本語）
４．学習展開

学習内容	児童の活動	指導の手立て（・）と評価（○）Ｔ１
１．課題を把握する	１．学習課題を知る おかしのはこが４つあります。１つのはこには、おかしが５こずつはいっています。みんなで何こになりますか。	・問題文をプリントにして配っておく。 ・文章を指で押さえながら読む（聞く）。 ・全員で声を出して読む。
２．見通しを立てて問題を解く	２．問題文を読んで立式し、答えを求める。 ・立式のわけを自分なりの方法で表現する。 ・４×５ ・５×４	・「式と答え、理由をノートに書きましょう」 ・立式ができない児童にかかわって、助言する（ブロックやヒント絵図を用いる） ・時間は１０分弱でできたところまでとする。
３．学びあい	３．話し合う ・二つの意見を比べて、自分の考えを発表する。 ・箱が４つあって、５こずつはいっているから。 ４×５＝２０ ・５こずつはいっているはこが４つあるから。 ５×４＝２０ ・５の４つ分だから５×４ ・ブロックで確認する。 	○意欲を持って、自分の考えを表現しようとしている。 ・「ふたつの式の違いは何でしょうか。どちらが今日の問題にあっていると思いますか？」 ・二つの考え方の説明を整理しながら板書する。 ・ブロックを並べて５の４つ分であることを確認し、５×４が正しいことをおさえる。
４．まとめ	４．練習問題をする テープを４本つなぎます。テープ１本の長さは３cmです。ぜんぶで何 cm になりますか。 ・立式とそのわけをかく。 ・３の４つ分だから３×４ あめを３こ買います。１こ５円のあめを買うと何円になりますか。 ・５の３つ分だから５×３ ・５の３倍で５×３	・問題にとりくむ時間を確保する。 ・立式の根拠をかくように指示する。 ・テープの図を用意し、提示することで３の４つ分になることを説明する。 ・お金の模型を用意し、提示することで５の３つ分になることを説明する。 ○何のいくつ分を読み取り正しく立式することができるか。

第２学年〇学級　算数科学習指導略案

指導者　〇〇　〇〇

１．日時　　１１月
２．単元　　「かけざん（２）」
３．本時のめあて
〇（算数）アレイ図を使った算数的活動により、４の段の九九を構成することに興味・関心をもって取り組むことができる。
〇(日本語)「〇の□つ分なので、〇×□」という言葉を用いてアレイ図を説明する。
４．学習展開

学習内容	児童の活動	指導の手立て（・）と評価（〇）
１．課題を把握する	１．学習課題を知る ●アレイ図をみて気づいたことを話し合う。 ・たてに９個、横に９個並んでいます。 アレイ図を　つかってみよう ・４×３となる図を作り、４×３を表すわけを考えて、説明する。 「たてに４個よこに３列あります。」 「４の３つ分だから４×３です。」 ・となりの友達に自分の考えを説明する。	・アレイ図を提示して、◉ の並び方に着目させて話し合わせ、アレイ図への興味・関心を高めるようにする。 ・アレイ図を提示し、色の違う２枚の紙を使って、同じように作ることを指示する。 ・たての数が「１つ分の数」を表し、よこの数が「いくつ分」を表すことをおさえる。 ①１つ分の数を決めて下の紙をおく。（かけられる数） ②いくつ分をあらわす紙をたてにおき、横にずらしていく。（かける数）
２．見通しを立てて問題を解く	２．自力解決をする。 ・４の段をアレイ図で作ってみる。 ・友達に説明をする。 ・「４の□つ分だから４×□です」ということばを使って説明する。	・４×１から４×９までの図を作り、たての紙を動かすことでかけ算ができている事に気づかせる。 ・図ができたら、説明をするように支援する。 ・説明ができにくい児童には、ワークシートを配布し、空白に数字を入れて説明する手立てとする。
３．学びあい	３．話し合う ●４の段のアレイ図を見て、気づいたことを話し合う。 ・たての数はずっと４のまま ・横に１つ動かすと４ずつふえる ・順序よくかけざんができる ・たてとよこを入れかえても答えが同じ ・４の段は２の段をふたつあわせたもの	・交換法則の発言があったときには、答えが同じものがあるということを確認しておく。 ・分配法則について、図のなかを２の段で囲むことによって気づくようにしたい。 〇かけざんの構成に興味をもち、進んで自分の気づきを発言する。
４．まとめ	４．まとめる ・ほかのかけざんもアレイ図で作る ３×７　　５×８ ６×５　　９×３	・わけを説明させる。 〇アレイ図を使って、「〇の□つ分」の考え方をもとに、かけざんを作ることができる。

［学校名：芦屋市立潮見小学校］

【具体的な研究テーマ】JSL カリキュラムの視点に立った授業
―「すべての児童がわかる授業をめざして」

1　教科：単元名 国語：食べ物のひみつを教えます―れいをあげてせつめいしよう―（説明文の学習）	
2　実施日（時期） 平成２５年１１月	3　実施場所 ３年〇組教室

4　児童・生徒の実態に応じたねらい

(1) 児童の様子･･･学年・国籍、学習状況、日本語習得状況など

①学年　３年生

②国籍　児童：中国　　父母：中国

③生まれ　中国　祖父母に育てられ、６歳で来日

④学習状況

・　自分の考えを持ち、積極的に表現しようとする。

・　２年生のころは、思い通りに話せないことに強いストレスを感じていたのか、日本語が身につかなかった。今年度に入って自信を持って話したり、質問に答えたりするようになり、挙手をして発言することが増えた。また、発表の声も大きくなった。

・　どの課題にも真面目に取り組む。間違えた漢字は 3 回書く・間違えは消さずにおいておくなどの、学習上の細かい指示も一度で意味を理解できる。

・　すべての学習を在籍学級で進めており、週 1 回、子ども多文化共生サポーターの支援を受けている。

(2) 日本語指導にかかる目標

①　「順序を表す接続詞」などの学習言語を習得させ、日常生活で話したり書いたりするときに活用できるようにする。

②　書く力をつけるため個別に話をする機会を持ち、書く目当てを意識して書かせる。

③　音読を通して読字の力をつける。

(3) 主な学習活動

〇　食材が姿を変えていることを説明する文章を書く。

・　調べたい材料を選び、取材をする。

・　選んだ材料について、分かりやすい説明の仕方を考えながら説明文を書く。

・　書いた文章を友だちと読みあい、自己評価をする。

５　評価の観点

⑴ 食べ物に関心を持ち、知りたい課題を明確にして取材することができる。

⑵ 「順序を表す接続詞」「一段落一事項」「文末の表現」に着目させ、分かりやすい説明をする際に要素について理解することができる。

⑶ 漢字・主述の呼応・改行の仕方に気を付けて文章を書くことができる。

⑷ 友だちの書き方の上手なところに気付くことができる。

６　指導内容の概要（※指導案別途添付）

⑴ 教科書にある例文を読み、学習計画を立てさせる。

⑵ 教師が提示した食材（大根）を例に、全体指導の場面で、既習の「分かりやすい説明のために大切なこと」を確認しながら、説明文を作らせる。

⑶ 自分が好きな食材を決め、マッピングにより記憶情報と知りたい情報を整理させる。

⑷「何について知りたいのか」課題を明確にして取材に臨ませる。

⑸ 段落の中の文章の構成・段落の順番・接続詞の使い方・文末表現を確認しながら、説明文の「中」を書かせる。

⑹ 説明文の全体構成を確認し、「はじめ」「終わり」を書かせる。

⑺ 読み返しながら書かせ、漢字・文字・主述の呼応・句読点などの言語事項について間違っていないかを確認させる。

・　説明の文章に合う絵を入れる。

・　友だちが書いた文章を読み合い、分かりやすく説明されているところを見つける。

・　自分の学習を振り返らせる。

７　指導内容・方法において工夫したところ

⑴ 学習内容の可視化

・　教科書に載っている例文を読ませるだけではわかりにくいため、指導者が実物の食材を用意し、それらの食材を題材として取り上げ、説明文の作り方を全体の場で実演してみせた。そうすることで、「説明の文章をどのように書いていくのか・段落内の文章の構成の仕方」を児童はイメージすることができた。

⑵ キーワード、ターゲットセンテンスの設定

・　「順序を表す接続詞」「一段落一事項」「文末表現」など、分かりやすい説明のために大切なことを常に意識できるように、短冊に書いて黒板に掲示した。特に大切な、三つの要素にはマークをつけた。（※９の写真参照）

・　校正のポイントをカードにして掲示した。

⑶ 学習意欲を高める工夫

・　さまざまな「大根」の加工品を用意し、味わわせたことで学習への意欲が高まった。

・　出来上がった文章を学級で一冊の本にまとめ、図書室に置くなどして多くの目に

触れるようにした。情報を発信する意識を持たせることで「書くこと」への意識が高まるよう努めた。

(4) 子どもの成長に合わせた教材の作成

・　下書き用の原稿用紙は、読み直して書き加えることができるよう行間隔を広めにとった。

・　取材のために必要な書籍や資料をわかりやすくリライトした。

8　教材・教具

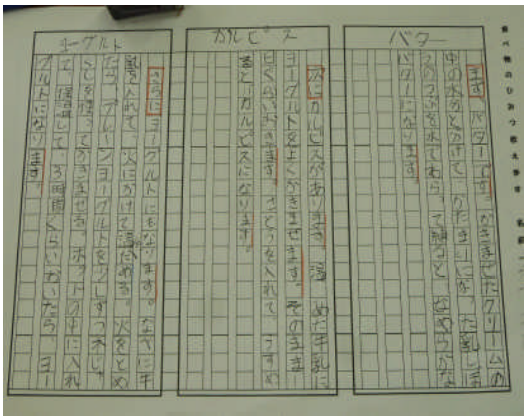
・　加工品や作り方を効果的に取材するためのマッピング用ワークシート

・　説明のための実際の食品

・　取材用ワークシート　・　下書き用原稿用紙　・　リライト教材

9　活動の様子（写真等）

・　分かりやすい説明文を書くために



・　一段落一事項を書くために

10　児童・生徒の感想等

(1)「順序を表す接続詞」に注目しながら読むと、説明文の内容がよくわかった。

(2) 作文は、どう書いたらいいのかわからないので好きではないが、今回、一段落ずつ書くテーマが決まっていたので、安心して書き進められた。

(3) 先生が大根の加工品を例に出してくれたので、説明の順と接続詞がよくわかった。

(4) 漢字を使うように意識するようになった。

11　日本語習得度チェックシートの活用と効果など

(1)　習得度チェックを行うことで自分のつまずきが分かり、正しい日本語を覚えたいという意欲が高まった。進んで日本語の学習に取り組んでいる。

(2) 講師を招き、「話す」「読む」においてＤＬＡを使った測定を行っていただいたが、対話を通した評価は児童の自己表現を引き出すことにつながり、その後の「読書をして簡単な感想を書く」という学習課題にも楽しく取り組むようになった。

(3) 高学年児童は、自分の日本語の習得度を知りたいと評価に積極的に取り組んだ。知ることが、次へのステップや進路を考えることにつながった。

12　実践をとおしての成果

⑴ 分かりやすい授業作りに向け全校で取り組んだことで、授業を改善して高めていこうという意識を共有できた。

⑵ 大阪教育大学臼井准教授に担任全員が授業を見ていていただき、指導を受けることができた。日本語の目標をたてる・ターゲットセンテンスとは・ワークシートと板書を連携させる・具体物の表示・子どもに学習のめあてをはっきり持たせるなど基本的なところを共通理解することができた。

⑶ 事後研究や講師の助言から学び得たことを、成果のひとつとし、下記に記す。

ア　教師の授業への姿勢や考えに関すること

・　子どもの考えと教師のプロセスを一致させること。

・　学習言語をいかに子どもの生活の中に実感としてつかませていくかを考え、教科の中身がわかるための大切な表現に注目すること。

・　大事なポイントを案外さらっと流してしまっていることがあるので、大事なところは丁寧に子どもと確かめていくこと。

・　教師が指導していくうえで大切な表現であるターゲットセンテンスを強く意識する必要があること。

イ　子どもへの支援に関すること

・　ワークやプリントは、簡単すぎてもいけない。何も考えなくても、適当に数字や言葉を入れたら正解してしまうものでは、子どもが思考する場がない。穴埋めにするにしても、どこが大事なのか、どこを考えさせたいのか、狙いをはっきりさせて、効果的なものを作ること。

ウ　教科の授業に関すること

・　算数では、概念に関することを表す言葉（(例）２年のかけ算「１つ分の数・いくつ分」「～ずつふえる」など）は、次の学年につながっていくので、特に子どもに丁寧に押さえさせる。

・　国語では、子どもに使わせたい表現や言葉づかいなどは、普段から短い作文や日記などを活用して慣れさせておくと、使わせたい時に有効に使うことができる

13　今後の課題

⑴ きめ細かな実態把握に基づく研究推進

・　一人一人の児童の語彙力、学習上の課題や不安に思っていることついて、より深く共通理解をはかる。

・　教職員の児童理解の視点を広げ、スキルの向上をめざす。

⑵ 永続的な日本語指導体制の確立

・　今年度は、取り出し授業を行うほどの児童は在籍していなかったが、あらゆる状況に備え、すべての教員が、日本語指導に一層理解を深めていく必要がある。

第３学年〇組　国語科学習指導案

指導者　〇〇　〇〇

１．平成２５年１１月１１日(水)
２．単元名　食べ物のひみつを教えます
３．教材名　食べ物のひみつを教えます　小学校国語３年　（光村図書３年上）
４．単元の指導目標
・　「はじめ・中・終わり」の構成を意識し，「中」の例と絵を読み合わせながら段落に分けて書くことができる。
・　書いたものを読み合い，意見を伝え合うことができる。
５．評価規準
【関】・　食べものについて関心を持ち，課題に合わせて調べたり書いたりしようとしている。
【書】・　書く目的によって必要となる事項と観点を理解し，取材している。
・「中」の部分で，内容のまとまりごとに段落を分け文章を構成している。
・　目的に応じて，事例を挙げて書いている。
・　自分の書き方と友だちの書き方を比べ，上手に説明しているところに気付くことができる。
【言】・　接続語を目的に応じて使い，文章を書くことができる。
６．指導計画　（全１４時間）　※「すがたをかえる大豆」の６時間を含む。

次	時	学習活動	教師の支援	評価規準
	1	・教科書の全文を読み，大豆を使った食品を確かめる。 ・これから「分かりやすいせつめい」のしかたを学び，『食べ物ひみつの書』を作ることを知る。	・給食の献立表を用意し，大豆からできている食べ物をほぼ毎日口にしていることに気付かせる。 ・今までに説明文の学習で学んだことを確認する。 「はじめ・中・終わり」「問いと答え」「はじめに問い，終わりに答え」「中で答えのせつめい」 ・「分かりやすいせつめい」とは何か明確にする。 『じゅん番に』『まとめて』『具体的に』	【関】積極的に大豆からできた加工食品を探そうとしている。（発言）
2	2	・「中」における，中心になる文をみつける。	・まとめクイズを通してまとめ（上位語）と具体（下位語）の関係をおさえる。 ・段落ごとに「まとめの文」を探し，そこには大事な言葉（くふう）が含まれて	【読】まとめと具体の関係を理解している（発言） 【読】段落中の中心文

			おり，これが「中心になる文」であることを確認する。	をとらえている。 （文章・音読）
	3	・文章全体の構成を知り，「はじめ」「中」「終わり」には何が書いてあるか整理して考える。	・接続詞に着目して段落の順序を確かめたり，具体例を整理したりする。 ・「はじめ」の部分に「問い」を入れるとしたらどんな文になるか考えさせる。	【読】目的に応じて必要な情報を特定し，書き抜いている。（文章） 【読】「問い」の形をとらない話題提示があることを理解し，文章で説明されていることを整理している。（文章）
	4 5 6	・「中」を詳しく読んで説明のしかたを見つける。 ・学習のまとめをする。	・「中」がない場合を考えさせ，「中」の役割を確認する。 ・中心となる文を段落の最後に移動し，元の文章と比べさせる。 ・作者がどうしてこの順番で例を挙げたのか考えさせる。 ・順番がなぜ「一つ目」「二つ目」ではないのか考えさせる。 ・写真の効果について考えさせる。 ・分かりやすいせつめいのしかたとは何か再度確認しながらまとめるように助言する。 ・文末表現や，「いる」「にる」などの調理するときの言葉に着目させる。	【読】「はじめ・中・終わり」の構成に注意して読んでいる。（文章） 【読】例示をとらえ，その具体例を整理しながら読んでいる。（文章） 【読】写真の役割について考えながら読んでいる。（発言） 【読】説明のしかたの工夫について整理している。（発言） 【言】文章中の表現や言葉に注目し，辞書を使って調べている。（文章）
	7	・食べ物について書かれた本を読み，感想を交流する。	・食べ物について説明した書籍や資料を用意する。 ・新たに「分かりやすいせつめい」が見つかれば全体に紹介させる。	【関】食べ物について説明した本に興味を持っている。（観察）
3	1 2	・教師の用意した加工品について、食品と食材の関係を知り、段落内の文章の構成を考える。	・「大根おろし・切り干し大根・ふろふき大根・たくあん」の実物を見せ、作り方を予想させる。 ・作り方から、説明の順序を考えさせる。	【関】食べ物について関心を持っている。（発言） 【関】食べ物について関心を持ち，課題に合

		・説明の順序を考え、説明文全体の構成を考える。 ・食材を決め、自分が選んだ加工品の加工のしかたについて調べる。	・食材に関連のある資料を事前に用意する。その際，文章を簡単に打ち直したものも資料として提示する。 ・調べたことを加工品ごとにわけてワークシートに整理させる。	わせて調べようとしている。（発言） 【書】目的によって必要になる事項と観点を理解し，取材している。（文章）
4	3	・メモを元に「中」の下書きを書く。	・調べたメモを文章にしにくい児童には，調べたことを話したり，教科書の文例を参考にしたりして書くよう支援する。	【書】書く目的によって必要となる事項と観点を理解している。（文章）
5	4本時	・文章例を見て良いところや直した方が良いと思う部分を考えて発表する。 ・グループでお互いの文章を読み合い，良いところやアドバイスを交流し合う。	・全体で教師の用意した文章例を見せ，良いところや直したほうがよい部分を交流させる。 ・気を付ける三つの要素を明確にする。 ・グループで交流したことを自分の文章に取り入れて下書きを完成させる。	【書】自分の書き方と友だちの書き方を比べ，上手に説明しているところに気付くことができる。（文章・発言）
	5 6	・始め・終わりを書く。 ・文章を推敲する。	・絵や写真などをどこに入れたらよいか考えさせる。	
4	7	・清書を書く。 ・できた文章を友だちと交流する。	・学習したこと以外にも自分で考えた工夫を入れてもよいことを告げる。 ・同じ食材を取り上げた説明文を紹介し，比べさせる。 ・比較が難しい児童には友だちの文章のどの部分が「中」であるかを一緒に確認する。 ・友だちの文章を読んだうえで，自分の文章を自己評価させる。	【関】食べ物に関心をもち，友だちの書いた文章を読もうとしている。（発言） 【関】自分の書き方と友だちの書き方を比べ，上手に説明しているところに気付くことができる。（発言）

７．本時の目標

・順序を表す接続語，文末表現，一段落一事項を意識して読むことができる。

８．日本語指導の目標

・理由を述べる表現を身に付ける

～に気を付けて読むと、～なので良いと思います。

～に気を付けて読むと、～なので直した方がよいと思います。

〇ターゲットセンテンス　　「どれに気を付けて読みましたか。」

９．本時の展開

主な学習活動	教師の動き	評価規準
「順番を表す言葉」,「一つの段落に一つの食品を書く」「文の終わりの言葉」,に気をつけて読もう。		
・全体で一つの例文を見て，良いところや直す部分を探す。	・「接続語」「一段落一事項」「文末表現」を意識させる。 ・良いところや直した方が良いと思う部分を児童が見つけやすいよう，教師が用意した例文を掲示する。 ・掲示したものに，良いところは赤線，直す部分は青線を引く。	
・推敲する。 良い→赤線 直す→青線	・「接続語」「一段落一事項」「文末表現」の三つに絞って線を引かせる。	・三つの事項に着目し，説明文の工夫を理解することができる。 （ワークシート）
・グループで友だちの文章を読み合い，良いところや直す部分を友だちに伝える。	・全体の場でひな形を使って，理由を述べる表現の定着をはかる。 ・良いところや直す部分を友だちに伝えさせる。	友だちの文章の良いところや，自分の文章と比較して気づいたことを相手に伝えることができる。（発言）

日本語指導研究推進事業　実践報告資料

［学校名：伊丹市立天神川小学校］

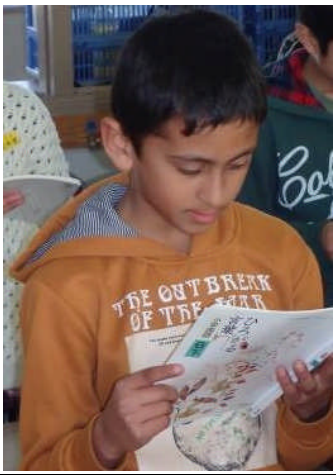
【具体的な研究テーマ】
「コミュニケーション力の育成」

１　教科：単元名 国語　「海の命」	
２　実施日（時期） 11 月７日～12 月６日	３　実施場所 ６年〇組教室　　日本語教室
４　児童・生徒の実態に応じたねらい ⑴ 児童の様子･･･学年・国籍、学習状況、日本語習得状況など ・ネパール人の男児で６年に在籍 ・３年半ほど日本で生活している ・日常会話がスムーズにできるくらいの生活言語は定着している。自分の気持ちを伝えることについては課題がある。 ・学習言語に関しては、生活に関わりのある言葉などは理解できている。生活とあまり関わりのない言葉については、写真や絵を見せるとだいたい理解できる。 文章の読み取りに関しては、理解できている部分も多いが、文章題などからキーワードを探して解くことは難しい面がある。 ・読める漢字は３年生の半分くらいまでである。読める漢字は増えてきている。取り出し指導で、いっしょに読みがなをつけた漢字は、やや難しい漢字でも後で同じ漢字が出てくると半分くらいは読める。書ける漢字は、２年生の半分くらいである。書ける漢字は増えてきているが、まだ習熟しているとまではいえない。 ⑵ 日本語指導にかかる目標 ・読める漢字を増やすとともに、書ける漢字も増やしていく。 ・理解し使えることばを増やすことを中心に学習言語の習得させる。 ・教科書の中の言葉を使うなどして、自分の思いを少しでも具体的に表現できるようにする。 ⑶ 主な学習活動 ・音読 ・物語の内容の読み取り ・教室のグループでの話し合い ・物語を読んで感じたこと、話し合ったことを発表	
５　評価の観点 ・自分から物語を読もうとし、内容を読み取ろうとしていたか。 ・自分の意見を、グループの仲間に伝えようとしていたか。	
６　指導内容の概要（※指導案別途添付） 教室で ・音読する ・感想を持った文章に線を引く ・グループやクラスで感じたことを話し合う ・自分の感想を友だちに伝える	日本語教室で ・音読の練習 ・わからない漢字に読みがなをつける
７　指導内容・方法において工夫したところ ・教室での学習の前に、日本語教室での学習の中で全文を読み、わからない漢字に読みがなをつけ、音読の練習を行った。 ・ある程度の文章のまとまりを読んだところで、わからない言葉に関しては絵や写真を見せて、イメージをとらえやすくした。 ・グループでの話し合いの前に、何を話したいかをたずねた。内容を理解していることや話せたことを評価し、自信を持ってグループでの話し合いに参加できるよう支援した。	

・何について話し合うのかなど担任の指導内容を、必要に応じてわかりやすい言葉で伝えた。

８　教材・教具
・読みがなをつけた教材文
・児童が理解しにくいと思われる言葉の写真や絵

９　活動の様子（写真等）
・音読はゆっくりと、文章を正しく区切って読めた。
・クラス全員の前での音読では、自信を持って挙手する場面が見られた。
・グループでの話し合いでは、友だちがしっかり聞いてくれたこともあり、伝えたい内容を話すことができた。
・グループでの話し合いと同じ内容であれば、クラス全員の前でも堂々と発表できた。



10　児童・生徒の感想等
・文の短い段落だったら、みんなの前でも読める。
・友だちの言っていることは、内容が分かるときと分からないときがある。
・意見を発表するのはまだ緊張する。

11　日本語習得度チェックシートの活用と効果など
・チェックシートの内容はほぼ習得している。
・チェックする中で、どの部分が習得できていないかの把握・確認ができた。
・ＤＬＡの『読む』の単元では、『見たことはあるけれど、名前を知らない』ものが、確認でき、それらについては、名前を教え、習得につなげることができた。テストをしなければ生活言語のレベルと照らし合わせて、「知っているだろう」と、見過ごしていたかもしれなかったので、細かく確認することができたのは成果である。
・ＤＬＡの『話す』では、基礎カード・タスクカードはクリアできたが、認知カードについては難しいことが分かった。話す手立てというよりは、事柄の細かい説明についてもっと語彙を増やしていく必要があることが確認でき、普段の学習の中で、語彙を増やすため、言葉や物事について説明をしながら語彙の習得を進めることができた。

12　実践をとおしての成果
・事前の学習で漢字の読み方と、文章の内容がわかっていることで、「何て読むの？」「どういう意味？」と質問する場面が少なくなり、授業に集中できた。
・自信を持って音読している場面、グループで発言している場面が、単元を通して増えた。
・自分でできると感じ、一人で学習したい時は、「自分でやる」と主張するようになった。また、分からない時は自分から聞くことができた。
・物語の中の言葉を使って、具体的な感想が言う場面が増えた。

13　今後の課題
・さらに理解できる言葉、使える語彙を増やしていきたい。
・自分の考えを話す場面も増えてきたが、グループの中で聞かれた事に対しては、答えられないこともあった。質問の内容を理解できていない時は、自分で友だちに「簡単な言葉で言って」などと言ってコミュニケーションを深めることができるよう支援していくことが必要である。

第６学年　国語科学習指導案

授業者　〇〇　〇〇

（日本語指導　〇〇　〇〇）

１．日時　　２０１３年　１２月　３日（火）４校時

２．場所・児童　６年〇組　３３名（男子１８名　女子１５名）

３．単元名　　「海の命」

４．単元の目標

・太一の成長の様子を、父、母、与吉じいさとのかかわりを通して読み深める。

・自分の考えを出し合い、友だちの考えを聴き合う中で、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

・音読することや友だちの意見を聞くことで、物語の内容を理解し、自分の感想を持つ。また、その感想を友だちに日本語で伝える。（日本語指導）

５．授業にあたって

個人テーマ「友だちの良いところを認め合おう」

１学期終了と共に２人の転校生を送り出し、2学期は３３名のクラスでスタートした。小学校最後の体育大会、そして音楽会と大きな行事を経験し、子どもたちもまた成長を成し遂げた。女子は一段と落ち着いた雰囲気をかもしだし、中学生に向けての準備が順調に進んでいるように見える。だが、対照的に男子は、相変わらず落ち着きなく、場の雰囲気関係なく、どんな時も有り余るエネルギーを発散しているかのように見える。幼くて元気者の男子と、男子を上手に相手してあげている女子、精神的な発達の違いが男女間でくっきりと現れている。男女共に仲良く、対立するようなことはなく、高学年には珍しく放課後も一緒に遊ぶほど本当に仲が良い。昼休みの教室は、陽だまりの窓際でおしゃべり、怒られる一歩手前程度のふざけあい、ダンスホールの場などクラスの憩いのサロンと化している。放課後もなかなか家に帰ろうとしないぐらい、友だちと過ごす時間を大切としている子が多い。教室が居心地の良い空間となっているようだ。

グループ活動においても、話し始めたら話題が途切れず、いつまでも交流し続けるグループが多い。良いも悪いもいろんな声がよく聞こえてくる。にぎやかでいいのだが、質の高い交流ができればと常に思う。まだまだ物語の深い部分までたどり着けず、物語の面白さやみんなで共感し合える喜びを感じないまま授業が進んでいることが多々ある。より深く物語の世界に入っていけるように、まずは自分がしっかり教材研究をすること。そして、子どものつぶやき、音読の声、一人ひとりの表情を見逃さず、自分自身が落ち着いて子ども同士をつないでいきたい。

本教材「海の命」は、太一の成長の物語である。ずっと昔から、この海で育ってきた

太一の家族。だれももぐれない瀬に、たった一人でもぐる父、どんな時も変わらない父に、太一はあこがれていた。その父が光る緑色の目をしたクエにもりをさし、自分にはロープを巻き付けてことときれていた。その父の死を心に秘めて、与吉じいさの弟子になり、父の海、瀬の主に近づいていく話である。海の世界を色、光で表してあり、その世界にわくわくしながら読み進めていける作品であり、子どもたちも、海の世界に引き込まれていくであろうと思われる。また、まじめで、一生懸命で父への思いを持ち続けている太一の姿にも、子どもたちも共感していけると思う。そして、与吉じいさの死も乗り越えて、太一は父の海に潜り、探し続けた瀬の主と出会う。その瀬の主に、太一はもりをつこうとするがやめ、「おとうここにおられたのですか。また会いにきますから。」といって帰って行く。父、与吉じいさの海への思いを受け継ぎながら生きてきた太一にとって「瀬の主・クエ」は、何であったのか、子どもたちと太一の気持ちに寄り添いながら考えていきたいと思う。

この作品の太一のたくましく、力強く生きる姿は、海を大切にして生きてきた父、与吉じいさから学んできたのだと思う。また漁師の太一は、「瀬の主・クエ」に出会うことで、海で生きることの誇りやこの海で生きてきた人々の思いなど、海の持つ素晴らしいめぐみを感じとっていったのだと思う。

この作品を通して、子どもたちと、自分につながるものを大切にして生きていく姿を読み味わっていきたい。1時間1時間を大切に子どもたちとこの作品を読んでいきたい。卒業まであと４か月、残り短い子どもたちと過ごす時間を大事にしていきたい。

６．指導計画（全１４時間）

第１次・全文を読む　　・感想を書く　　・難語句調べ　・・２時間

第２次・父に対する太一の思いを読む・・・・・・・・・・・・２時間

・与吉じいさの海への思いを読む・・・・・・・・・・・２時間

・与吉じいさの死をさとった太一の思いを読む・・・・２時間

・母の思い、太一の海への思いを読む・・・・・・・・・２時間

・瀬の主と出会った太一の思いを読む・・・・・・・・・２時間

（本時１／２時間）

・成人した太一の海への思いを読む・・・・・・・・・・１時間

第３次　　読後の感想文を書く・・・・・・・・・・・・・・・・１時間

７．本時の目標

瀬の主・クエと出会った時の太一の様子や気持ちを読む。

自ら意欲的に物語を読み、内容を読み取って感じたことを友だちに伝える。

（日本語指導）

８．本時の展開

学習活動	教師の支援	日本語指導
１．五場面を音読する。 ・順番に読む ・一人読み	・ゆっくりと場面の様子を思い浮かべながら　読むように声かけをする。	・事前にルビを振る。 ・言葉を理解させながらゆっくり読ませる。
２．五場面についてそれぞれの読みを聴き合う。	・子どもたちの読みが、つながっていくようにする。 ・それぞれの思いが出しやすいように、グループでの交流を取り入れる。 ・交流が進みにくいところはグループに入って声かけをしていく。 ・教材文にもどって読めるように、言葉をさがしたり、文を読んだりする。	・書き込む前に日本語指導と感じたことやわからないことについて話す。 ・なるべく友だちとのやりとりに任せる。 ・友だちがどの部分を発表しているのかを理解していない場合支援を行う。
３．太一の様子や気持ちを考えながら音読をする。	・出し合った思いを、思い浮かべながら読むように声かけをする。	・ゆっくり読ませる。

日本語指導研究推進事業　実践報告資料

［学校名：　姫路市立琴陵中学校］

【具体的な研究テーマ】
日本語指導を工夫したわかりやすい授業づくり

1　教科：単元名 **数学科　　「中点連結定理」**	
2　実施日（時期） **１１月１８日(月)**	3　実施場所 **３年〇組**

4　生徒の実態に応じたねらい

(1) 生徒の様子･･･学年・国籍、学習状況、日本語習得状況など

日本語指導対象生徒は、フィリピン国籍の中学３年生で母国語はフィリピノ語である。在留期間は２年６ヵ月である（1 月現在）。学習態度は良好であり、高校進学を希望している。ノートの取り方は非常に丁寧であるが、板書を写すことに精一杯で、内容理解までには至っていない。普段の生活では、友達と仲良く日本語で会話している。

(2) 日本語指導にかかる目標

・中点が線分を二等分する点であることがわかるようにする。
・「三角形の２辺の中点を結んだ線分は、底辺と平行で、その長さは、底辺の１/２である。」という中点連結定理がわかるようにする。

(3) 主な学習活動

・三角形を書いて、辺の長さをはかり、中点を見つける。
・２辺の中点を結ぶと、他の１辺と平行になり、長さはその辺の半分になっていることを理解する。

5　評価の観点

・定規で長さを測らず、コンパスと定規で中点を見つけられるようにする。
・相似な三角形では、どの辺の比も等しいことが理解できる。
・相似比を使って、わからない辺の長さを求めることができる。

6　指導内容の概要（※指導案別途添付）

・三角形の相似条件（三辺比相等、二辺比挟角相等、二角相等）を確認させる。
・三角形の１つの頂点からその点を含む辺の中点までの長さが、その辺の半分になっていることを理解させる。
・三角形の２辺の中点を取らせる。
・三角形の２辺の中点を結ぶと、もう１つの辺と平行になり、長さは、もう１つの辺の長さの半分になっていることに気づかせる。
・中点連結定理「三角形の２辺の中点を結んだ線分は、底辺と平行で、その長さは底辺の 1/2 である。」について理解させる。
・作図にて手間取っているときには、手本を見せて手助けを行う。

7　指導内容・方法において工夫したところ

・わかりやすい日本語と短い文での発問を心がけた。
・ワークシートを作成し、学習内容をまとめやすくした。また、学習の振り返りもしやすいようにした。
・指導者も定規、コンパス、分度器を用意して、作業に手間取っているときに、手本を見せて理解を促進した。
・ノートに図を記入させることで視覚的にとらえやすくする。
・中点連結定理を使って長さを求める問題を解かせて、本時の授業の内容が理解できたかどうか確認した。

８　教材・教具

・定規、コンパス、ワークシート　日本語指導ノート

９　活動の様子（写真等）

・同室授業で、横に座って学習支援を行っている。
・コンパスと定規を使って線分の中点を見つける作業を行っている。
・二直線が平行な時には、同位角が等しくなることを確認させた。
・作業に手間取っているときには、作図の手本を見せて理解を深めた。

・板書の作図は、定規とコンパスを使っていねいにノートに記入させた。
・授業中は、「聞く・読む・書く・話す（発表する）」という学習活動を一時間の授業の中にバランス良く取り入れている。
・子ども多文化共生サポーターの先生にも協力していただいている。
・授業の様子を大阪教育大学の臼井先生に参観していただき、日本語指導についての支援の方法や留意点を助言していただいた。

10　生徒の感想等 ・取り出し授業では、「みんなの日本語初級標準問題集」を使って学習している。初めはできなかった問題が、その時間の終わりには解けるようになり、今では喜んで日本語教室に来るようになった。 ・テスト前には、放課後に「テスト勉強」を一緒に行った。 ・理科では、実験や観察を取り入れた指導も行っている。 ・いろいろな日本語表現を覚えて、文章表現ができるようになってきた。これからもっと漢字の読み書きができるようにしたい。
11　日本語習得度チェックシートの活用と効果など ・各学期の終わりに日本語習得度チェックシートを活用して、日本語の習得状況を確認している。習得レベルの変化から指導内容や指導方法の改善に役立てている。 ・生徒自身が、どれだけ日本語力を身につけているか確認できる。その結果を踏まえて、今後の学習について、職員間で日本語力向上に向けての課題を共有できる。 ・ＤＬＡを行うことで、対象生徒の日本語能力を把握し支援対象生徒の有効な日本語指導・支援の在り方を考えることができた。
12　実践をとおしての成果 ・在籍学級での一斉授業では、該当する生徒が理解しやすいように、学習ポイントの明確化、視覚的な学習支援、構造化した板書を心がけた。その結果、該当生徒だけでなく、他の低学力の生徒にも学習内容の理解度を高め、学級生徒の基礎・基本の定着という観点からも効果を広げることを心がけた。 ・在籍学級で授業を受けることで、授業中に発表する等、積極的な学習ができるようになってきた。また、定期テストを受けて、努力が点数となって表れると、次のテストでは「もっと良い点数を取りたい」という意欲が見られるようになった。テストに向け、より学習意欲を高めていくことが、自分の持ち味であるバスケットボールを生かす進路を切り拓く力へと発展することにつながっている。 ・授業以外では、生活ノートの５行日記を日本語で文章を作って書くことができる。漢字を積極的に使ったり、自分の気持ちを表現できる語彙を探したりと表現する意欲が伸びてきた。
13　今後の課題 ・日本語指導に関する授業研究や校内研修を計画的・継続的に推進し、各教科担任が日本語指導を工夫したわかりやすい教科指導をより進んで実践できるような環境づくりを推進していく。 ・卒業後の進路を保障するためにも、よりきめ細やかな教科指導が授業等を通して実践できるように教職員が協働して行える支援体制を構築する。 ・教科担任制中学校の授業で、より効果的な教科型日本語指導ができるような時間割を年度当初に編成する。 ・自立した家庭学習を継続していくために、本人及び保護者への日々の丁寧な支援が今後も必要である。

第３学年〇組　　数学科学習指導案

指導者　　（Ｔ１）〇〇　〇〇
（Ｔ２）〇〇　〇〇

１．単元　　図形と相似　「中点連結定理」

２．趣　旨

〇　本題材と関連する学習は、小学校では等しい図形・拡大図縮図などの単元で基礎基本的な学習を行なっている。中学校では、第２学年において、三角形の合同条件を用いて三角形や平行四辺形などの基本的な性質を論理的に確かめることを学習している。本単元では、前学年までの既習内容を基にして、相似の概念を導入し、相似な図形の性質や三角形の相似条件（３種類）・平行線と線分の比・中点連結定理・基本的な立体の相似について学習していく。また、線分の長さを求めたり相似条件等を用いて説明したりしていくことで数学的思考が高まるとともに、論理立てて証明問題に取り組むことで言語能力が向上することにもつながる内容となっている。

〇　本学級の生徒たちは、日頃から落ち着いた雰囲気の中で、意欲的に学習に取り組んでいる。これらの取り組みが、結果として学力向上につながってきている。図形領域については、小学生の頃から本単元につながる「等しい図形、拡大図・縮図」等の基礎的な学習をしている。その中で、角の大きさや線分の長さを求めることは比較的得意とする生徒が多い。しかしながら、基本的な定義・定理を用いて論理的に説明できる生徒は多いとはいえない。さらに、授業において課題学習に取り組ませる際、論理的に証明する問題になると、苦手意識から積極的に取り組むことができなくなる生徒もいるのが現状である。

〇　本単元である図形と相似において、「中点連結定理」は円周角の定理や三平方の定理と並んで中学校の図形領域における印象深い定理である。ここでは、三角形の相似の証明を利用することで中点連結定理を導き出させたい。そして、この定理等を利用しながら線分の長さを求めたり、証明問題に取り組ませたりしていきたい。また、一般の四角形のもつ美しい性質にもふれさせていきたい。さらに「～より、～だから、～は等しいので」等を用い、論理立てて説明していく言語能力（話す力・書く力）も身につけさせていきたい。

３．小中一貫教育の視点

〇　小学校６年生で図形について観察や構成要素に着目するなどの活動を通して、拡大図や縮図について学習している。中学校では、図形の性質の考察や計量を用いるとともに、見通しをもって論理的に考察し表現することができることを押さえておく。

４．単元目標

＜関心・意欲・態度＞

中点連結定理などを使って、進んで図形の性質を明らかにしようとしている。

＜見方や考え方＞

中点連結定理などを使って、図形の性質を証明することができる。

＜技能＞

中点連結定理などを使って、辺の長さなどを求めることができる。

＜知識・理解＞

中点連結定理について、平行線と線分の比の性質と関連付けて理解している。

５．指導計画（２４時間）

第一次	図形と相似	8 時間
第二次	平行線と線分の比	７時間（本時第６時）
第三次	相似な図形の計量	５時間
第四次	相似の利用	２時間
第五次	章末問題	２時間

６．本時の目標

【教科の目標】

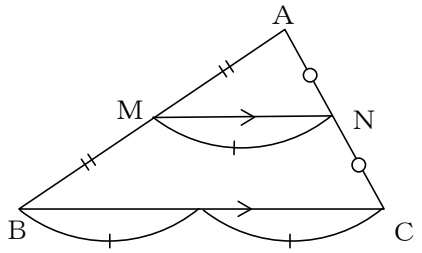
・中点連結定理を理解し、それを使って辺の長さを求めることができる。＜技能＞

・中点連結定理について「平行線と線分の比の性質と関連付けて理解している。＜知識・理解＞

【日本語指導の目標】

◎中点連結定理を利用する中で「～より、～だから、～は等しいので」を用いることができる。

７．指導過程

学　習　活　動	支　援（・）　と　評　価（●）
１．三角形の相似条件を確認する。	・中点連結定理の証明が理解しやすいように、３つの相似条件（三辺比相等・二辺比挟角相等・二角相等）を確認させる。（黒板に掲示しておく）
２．中点連結定理について学習する。 （１）△ＡＢＣの２辺ＡＢ，ＡＣの中点をそれぞれ，Ｍ，Ｎとすると，線分ＭＮと線分ＢＣの間にはどんな関係があるか考える。 ①AM：AB＝AN：AC＝１：２ ②MN//BC ③MN：BC＝１：２	・△ＡＭＮと△ＡＢＣに着目させ、２つの三角形が相似であることを、対応する辺を確認しながら説明する。 ・ヒントカード等を用いて、端的に「**同位角**」について確認させる。（T２）
（２）中点連結定理について理解する。 ①ＭＮ//ＢＣ ②ＭＮ＝1/2ＢＣ  	・説明を交えながら「**三角形の２辺の中点を結んだ線分は、底辺と平行で、その長さは底辺の 1/2 である**」という**中点連結定理**を理解させる。 ・中点連結定理について、黒板に「中点連結定理の性質」を掲示しておき、常に確認ができるようにしておく。

３．練習問題を解く。	
（１）問１を解き△ＤＥＦの周の長さを求める。	・問題文の「中点」に着目させ、中点連結定理を利用すればよいことを伝える。 ・捉えにくい場合は、図を分割したワークシートにより理解を促したい。（T２） ●中点連結定理を利用して、周の長さを求めることができる。（技：観察）
（２）「ひろげよう」を解く。 （問）四角形ＡＢＣＤをかき、４辺ＡＢ，ＢＣ，ＣＤ，ＤＡの中点をそれぞれ，Ｐ，Ｑ，Ｒ，Ｓとします。このとき，四角形ＰＱＲＳは，どんな四角形になるか考える。	・問題文の「中点」という言葉から、中点連結定理を利用することを捉えさせる。 ・ノートに図を書かせ、視覚的に捉えやすくさせる。 ・四角形ＡＢＣＤがどんな四角形でも、できた四角形ＰＱＲＳは、「一組の向かいあう辺が等しく平行である」ので、平行四辺形になることを理解させる。
（３）問２を解く。 （問）前ページの「ひろげようどうなるかな」で、四角形ＡＢＣＤの対角線の長さが等しいとき、四角形ＰＱＲＳはどんな四角形になりますか。	・ヒントカードを用い理解を促す。（T2） ・小グループにさせて解き方について話し合わせる。 ・文章にできにくい生徒には、書き方の一例を示し、理解の一助としたい。 （書き方の一例） △ＡＢＣで、点Ｐ・Ｑは辺ＡＢ、ＢＣの中点だから、中点連結定理よりＰＱ＝1/2ＡＣ また、△ＡＤＣで同じようにして、中点連結定理よりSR＝1/2AC 同様にして△ABD で点 P・S は辺 AB、AD の中点だから、中点連結定理より PS=1/2BD また△BCD で同じようにして、中点連結定理より QR＝1/2BD 仮定より AC=BD だから PQ=SR=PS=QR ４つの辺の長さがすべて等しくなるのでひし形である。 ●中点連結定理を利用するなかで「～より、～だから、～は等しいので」を用いることができる。 （日本語指導：観察） ・早くできたグループは、「練習問題」をさせ、中点連結定理について理解を深めさせる。
４．学習のまとめをする。	・「**中点連結定理**」について再度確認させ、次時につなげる。